

# 7月24日通りのクリスマス

2006(平成18)年10月25日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督＝村上正典／脚本＝金子ありさ／原作＝吉田修一『7月24日通り』(新潮社刊)／出演＝大沢たかお／中谷美紀／阿部力／小日向文世／YOU／川原亜矢子／沢村一樹／上野樹里／佐藤隆太／劇団ひとり(東宝配給／2006年日本映画／108分)

……遂に日本にも本格的ロマンティック・コメディが登場した。と言いたいところだが、その完成度は……？ 美人をブス風にするのは、メガネをかけ、ヘンな髪型にし、ダサい服装をさせれば簡単だが、天下の美女をそうするには、かなりの勇気が……？ 長崎の街をリスボンの街に見立てるといふ、原作とこの映画の発想は大好きで大いに感心。しかしアニメの王冠やポルトガル人親子の登場(?)など、『電車男』ほどコメディ色を強めなくてもよかったのでは……？ でも、やっぱり女の子はこういう映画が大好き……？

## 目指したのは JAPAN 製ロマンティック・コメディの誕生……

この映画は『電車男』(05年)を大ヒットさせた村上正典監督と脚本の金子ありさ氏が、『ラブ・アクチュアリー』(03年)や『ブリジット・ジョーンズの日記』(01年)のようなロマンティック・コメディがなぜ日本でできないのかという思いから実現させたとのこと。その工夫の1つとして、王冠のアニメが登場したり、ポルトガル人親子が登場したりするが、これはすべて平凡で目立たず、恋愛に縁のないヒロイン本田サユリ(中谷美紀)の妄想の中だけに登場するもの。

ロマンティック・コメディという場合の「コメディ」の部分の表現の仕方は難しいが、私はそれは基本的にストーリーの組み立ての面白さと俳優陣の演技力によって実現すべきと考えているので、これら余分なものの登場には反対。せっかく中谷美紀と上野樹里という2人の美女を「ブス役」として使うことができるのだから、その監督特権(?)を最大限活用してコメディ色を出せば十分なのでは？

## サユリのキャラは……？

MOTE 女を目指すことに目覚めるまでのサユリの最大の特徴は、『ただ、君を愛してる』（06年）の宮崎あおいと同じくメガネ。一般的に女性はメガネをかけることを嫌がるが、メガネは時として女性を知的に見せる効果もあるはず……。しかし、映画前半におけるサユリのメガネのかけ方は最悪で、いかにも鼻に引っかけたようなメガネで、ダサイ服を着た市役所の職員では誰も見向きもしないのは当たり前。大学では演劇部だったが、彼女の担当は小道具係で、そこでも失敗ばかりしていたことは容易に想像できそう……。

## サユリの趣味は……？

大学時代から現在に至るまで男に縁がなく、現実の男との恋には一切無関心なサユリの趣味は、第1に自分の住む長崎のまちをリスボンのまちに見立てて妄想すること。ちなみに、この映画のタイトルとなっている「7月24日通り」とは、ポルトガルのリスボンにある通りのことで、「長崎西通り」とそっくり？ また、長崎とリスボンが似ているのは路面電車、坂道と石畳、さらに港町であることや、銅像や建築物など。しかし、これってかなり主観的。そして第2の趣味は、自分だけの「王子様ランキング」をつけることだが、これも『電車男』の女版のようなヘンな趣味。そんなサユリの愛読書は漫画『アモーレ・アモーレ』で、その主人公ホセを永遠のヒーローと考えているようなヘンなオンナ……。

## 王子様ランキング1位を独走するのは……？

サユリの王子様ランキング1位を397週にわたって独走しているのは、憧れの演劇部の先輩奥田聡史（大沢たかお）。奥田は現在ライティングデザイナーとして東京で大成功しているが、今は職場の上司安藤譲（沢村一樹）と結婚している演劇部の先輩の亜希子（川原亜矢子）から聞いたところによれば、奥田が自著のサイン会のために長崎に戻ってくるとのこと。それを聞いたサユリは「現実の恋なんて興味ない」と宣言しているにもかかわらず、その心はウキウキと……。

演劇部のOB会に出席するべく会場に向かったサユリだったが、リスボンと同

じような長崎名物(?)の路面電車の中で偶然隣に座ったのが奥田。2人は自然に連れ添って会場に入ったが、奥田はすぐに周りを取り囲まれ、サユリからまた遠い存在に……。しかし、そこでドンくさいミスをしでかしたサユリに近づき、「白馬の騎士」のような行動をとったのが奥田。これによって、一瞬「これは!」と思われる雰囲気になりかけたが、そこに登場したのが奥田の元カノだった亜希子。やはりこの2人は今でも……?

## 自慢の弟とメグミの結婚は……?

王子サマとお姫サマは生まれた時から定められているものと考え、同時に自分はダメ女と決めつけているサユリは、「ミスター長崎大学」に選ばれるほどハンサムな弟耕治(阿部力)が自慢の種で、身内ながら彼はランキング第3位。したがって、耕治は当然お姫サマと結婚すべき運命にあると信じており、現にこれまで彼がつき合ってきた彼女はその系列に沿う女性ばかり。

ところが、妻と死に別れた父親の五郎(小日向文世)が、そのガールフレンド(愛人?)の海原和子(YOU)と共に営んでいる喫茶店「本田館」に、耕治が連れてきた彼女神林メグミ(上野樹里)は、自分と同じダメ女……。しかもその数カ月後には、耕治は何と妊娠したメグミと結婚すると宣言し、子供に甘い父親はそれを易々と了解したから、収まらないのがサユリ。王子サマがダメ女と結婚すれば、不釣り合いなダメ女は結局ダメになり、余計不幸になるという独自の説を主張して、サユリは2人の結婚に猛反対。さて、弟とメグミの行く先は……?

## メグミの答えにハタとひざを打ったが……

私は大学の講義でよく、本音と建前の二枚舌はナンセンスという話をしているが、その時いつも例にあげるのが、教会の結婚式のお話。すなわち、神父からの「病める時も貧しき時もあなたは夫(妻)を愛することを誓いますか?」という問いに対して、みんな当然のように「誓います」と答えていることのインチキ性……。

これは、キリスト教における「神との誓い」にどれほどの重みがあるのか、すなわち、その誓いを破った場合には神サマからいかなる処罰が下されるのかを十分自覚することなく、日本人は単なる形式や儀式として答えているため。しかし自分の

心に忠実に従えば、そんなことを誓える人はそれほど多くなく、本音の回答はせいぜい「そうするつもりです」あるいは「そのように努力します」という程度のはず……？

さて、今日のクリスマスイブは、耕治とメグミの結婚式の日。メグミはバージンロードを歩き、父親の手から新郎の手に引き渡された。そして、まず新郎は神父に対し「誓います」と答えたが、メグミは……？ この結婚式のシーンはこの映画のハイライトの1つ。再三の問いかけに対し沈黙を続けていたメグミは、遂に意を決したように「できません」と答え、姉のサユリに対して、「お姉さんの言っていたことが正しいと思います」と言いはじめたから大変。それを聞いたサユリは、これに対してどんな「反論」を……？ そして、耕治とメグミの結婚式はどんな結末を……？

### キーパーソンは森山かも……？

サユリをダメ女と認めつつサユリのが大好きなのが、サユリの幼なじみで今は南蛮堂書店につとめている森山芳夫（佐藤隆太）。サユリの中では王子様ランキングにももらないダメ男だが、彼はサユリとよく似た、王子サマ・お姫サマと自分たちは所詮世界が違うのだという考え方を持っていた。しかし、森山がサユリと違うのは、サユリは1人妄想の世界に生き、リスボンのまちや王子サマを夢見ていたが、森山は現実をしっかりと見据え、ダメ男の自分とダメ女のサユリが最もふさわしいカップルだと信じているところ……。ところが、そんな森山の意図に反して、サユリはいつまでも王子サマを夢見ているばかり……。

そんな森山もサユリの巧みな弁論によって（？）、ダメ女の世界に属するメグミが、本来王子サマの世界に属するサユリの弟耕治との結婚にふみ切った姿を見て、やはりサユリも違う世界に飛び込んでいくべきだと考えたよう。その結果、大弁論をぶったサユリに対して、森山は「結婚式に来ていた奥田を追い返したが、今から追いかければまだ間に合うはず……」とけしかけた……。したがって、この映画がハッピーエンドになるか否かは、実はこの森山がキーパーソン……？

### 幻想の王子サマから現実の男性に……

奥田は東京で大成功を収めているためか、故郷の長崎に戻ってくると大学のOB会でも大人気だし、今は安藤と結婚している元カノの亜希子ともヨリを戻し

ている様子……？ そんな風に考えてサユリは、あくまで奥田を夢の世界の王子さまと考えていたが、なぜか奥田から「やっぱり笑っている顔の方がステキだよ」などと言われるように。そして、次第に奥田が現実の男性になりつつあった。

それを後押ししたのが、自分自身も和子に恋をしている父親の五郎。がぜん「MOTE女」を目指しはじめたサユリは、まずはメガネを捨て、髪形を変え、ファッションを工夫していくと、少しずつだがホントにMOTE女に変身……。さてこうなると、今までは天と地ほどの隔たりがあった2人の距離が急接近……。こりゃハッピーエンドの匂いがしてきたよ……。

## エンディングのハイライトは……？

ロマンティック・コメディでは、ハッピーエンドが重要なポイント。そんなことは百も承知の村上正典監督が設定したハイライトシーンは、ライティングデザイナーとして大成功している奥田にふさわしく、美しくライティングされた高さ7mの電飾ツリーの前が舞台。その日は当然クリスマスイブ。そこで交わされる美男美女の美しいキスシーンは、ロマンティック・コメディの歴史に残る名シーンになるかも……？ 私がこのシーンを観て思い出したのは、今は反町隆史の奥さんとなり、母親になった松嶋菜々子が主演した『恋と花火と観覧車』（97年）のハイライトシーン。その美しさは今でも強く私の印象に残っている……。

## 追加的なエンディングも『恋と花火と観覧車』と同じ……

『恋と花火と観覧車』は、妻を亡くし一人娘と一緒に暮らしている森原邦彦が娘と同じような年の野々村史華と互いに恋に落ちるといった物語だったが、この映画には追加的なエンディングがあった。それは史華がお茶の勉強のために1人ロンドンのホテルのラウンジで働いているところに、森原が訪れてくるというシーン。

この『7月24日通りのクリスマス』にもこれと同じような追加的なエンディングがある。それは、ついに結ばれた奥田とサユリの2人が、ホントにリスボンの7月24日通りを訪れているシーン。「7月24日通りなんてない！」と言っていた奥田だったが、路面電車、坂道、建物が長崎とそっくりなりリスボンの通りは、まさに「7月24日通り」……。

2006（平成18）年10月26日記